2005　年　1　月　11　日

人間科学研究科長　殿

大久保 智生 氏　博士学位申請論文審査報告書

大久保 智生 氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱うけ審査をしてきましたが、2004 年 12 月 10 日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名：大久保 智生

2. 論文題名：青年の学校適応への関係論的アプローチ

3. 本文：

本論文では、青年の学校適応の問題を関係論の視点から検討している。

本論文における関係論とは、一般的な相互作用論とは異なる視点であるといえる。一般に相互作用論では、個人と環境が前提となり、個人と環境が出会ったところに相互作用が起こると考える。それに対し、関係論とは，個人を前提とするのではなく、関係を前提とすることを強調する立場と本論文ではとらえている。実際の学校適応の問題を考えると、両者の差異は明確となる。いじめを例にとると、相互作用論では、いじめっ子といじめられっ子がおり、いじめっ子特性といじめられっ子特性が出会うところにいじめという現象が起きると考える。一方、関係論では、相互行為によって、いじめっ子といじめられっ子が生じると考える。つまり、まず、関係があり、そこからいじめっ子特性といじめられっ子特性という個人の特性が生まれると考えるのである。したがって、もともといじめっ子特性やいじめられっ子特性があったと考えるのではなく、相互行為によって構成されたと考えるのである。いじめでは、いじめっ子といじめられっ子が入れ替わることが指摘されているが、いじめっ子がいじめっ子特性をもっているのなら、あるいじめっ子がいじめられっ子に変化した場合、その子は両方の特性をもっていることになり、この変化を説明することができない。また、特性を前提として考えると、いじめられっ子にも問題があると考えなければならなくなり、学校適応の問題の発生を必然化することになる。逆に関係論では、アプリオリにいじめっ子、いじめられっ子に問題があるとは考えない。問題の発生を関係のあり方にあると考えるため、関係のあり方によっていじめが生じたり、生じなかったりすると考える。したがって、関係論では個人と環境の関係（相互行為）を分析単位とし、そこから個人と環境の特性が生まれると考えるため、関係によって個人と環境の特性は変わってくるととらえるのである。本論文はこうした視点に基づき、学校適応の問題について検討している。

本論文を要約すると、序論、本論、結論から成り立っており、本論は第Ⅰ部から第Ⅲ部までの 3 部構成となっている。

序論（第 1 章、第 2 章）では、学校適応に関する先行研究を概観し、その問題点について検討している。まず、学校適応に関する研究を①適応状態の測定に関する研究、②適応状態の予測に関する研究、③問題行動に関する研究の 3 つに分類している。その分類に基づく形で、3 つの研究の概観と問題点について検討し、①適応感がどのように規定されているのかを検討すること、②学校適応を内面性の問題、もしくは関係性の問題としてとらえて予測・理解するのがよいのかを検討すること、③問題行動は不適応行動なのか、適応行動なのかを検討することという本論文の目的を設定している。設定した目的に対応した形で本論の第Ⅰ部から第Ⅲ部で実証研究を行っている。

本論の第Ⅰ部（第 3 章、第 4 章、第 5 章）では、適応感がどのように規定されているのかを検討している。その結果、個人と環境の関係によって規定されていることを明らかにしている。また、個人と環境の関係によって規定されていることからも、適応感の規定因は学校ごとに異なっていたことを示している。こうした結果は、これまでの適応感研究の前提を覆すものであり、先行研究が考える勉強もでき、教師との関係もよく、友人との関係もよい生徒が学校に適応しているわけではないことを明らかにしている。これまでの適応感研究の前提を覆すものである。また、欲求の充足が適応の規定因となっていることも明らかにしている。

本論の第Ⅱ部（第 6 章、第 7 章、第 8 章）では、学校適応を内面性の問題としてか、関係性の問題としてとらえて予測・理解するのがよいのかを検討している。その結果、個人変数は適応の問題とは直接関連せず、個人―環境の適合性の変数のほうが適応の問題と関連していたことを明らかにしている。この結果から、どのような個人の特徴が望ましいか、求められているかは環境との関係次第であるため、適応の問題において望ましい個人の特徴はなく、重要なのは個人と環境の適合性であることを示唆している。したがって、適応の問題を内面の問題としてではなく、関係の問題としてとらえる視点の有効性を示している。

本論の第Ⅲ部（第 9 章、第 10 章）では、問題行動は不適応行動なのか、適応行動なのかを検討している。その結果、荒れている学校の反社会的行動をする生徒の適応感が高いことからも、反社会的行動は適応的な行動であると考えられ、能動的非行少年観の視点を実証している。また、問題行動の続く学級では、それを支持する雰囲気があることが示している。したがって、問題行動、特に反社会的行動は一概に不適応行動なのではなく、学校内の価値観や文化と適合した適応行動であることを明らかにしている。

結論（第 11 章、第 12 章）では、これらの研究結果をまとめるとともに本論文が学校適応の問題に対して何を明らかにしたのかという本論文の成果を論じ、その成果による提言を行っている。また、今後の課題と今後の展望について検討している。

本論文は合計 13 の研究を下敷きにして構成された新しい学校適応の見方の提案を試みたものである。本論文の評価すべき点は、大別すると以下の 3 点を挙げることができる。

第 1 に、学校適応の問題を考える上で、現実を見ることの重要性を示している点である。先行研究では、勉強もできて、友人との関係もよくて、教師との関係もよいという理想的

な学校に適応している青年を想定してきた。しかし、現実にはこうした生徒だけが学校に適応しているわけではない。本論文で示しているように、むしろ学校によっては、教師と良い関係を築くことなどは仲間からの排斥につながる可能性もあるといえる。つまり、本論文は、望ましい適応というものはなく、適応を規定する要因は学校によって異なるということが明らかにしているのである。本論文では、伝統的な枠組みにとらわれない関係論的な視点が、現実に何が起きているかを実証することにつながると終始一貫して強調している。こうした関係論的なものの見方へのパラダイムシフトを提案している点が評価できるといえる。

第 2 に、学校適応の問題を内面の問題としてではなく、関係の問題としてとらえる視点の優位性を実証的に示している点である。これまで学校適応の問題は、性格特性や欲求などの個人の内面の問題としてとらえられてきたが、周囲との関係の問題としてとらえる視点の優位性を事例からも大量調査からも実証したことは、非常に意義があるといえる。また、こうした結果は、現在の心理主義や心理学化といわれる風潮に逆行するものであり、心の教育や心のケアなどへの批判としても非常に意義があるといえる。

第 3 に、問題行動を適応行動としてみる視点を実証的に示している点である。これまで、問題行動は一義的に不適応とされてきたが、前述の周囲との関係の問題としてとらえると、適合的（適応的）な行動としてとらえられることを実証している点が評価に値するといえる。これまで、何が適応的かという問題は、適応を学校（社会）の側から見るか、個人の側から見るかといった見方の問題としてとらえられてきた。しかし、こうした見方の違いは、単にどこから見るかの違いであり、こうした議論では、問題行動に対して有効な対策をたてられていない。むしろ、学校（社会）の側から見たとき不適応であるにも関わらず、問題行動をする生徒がその状況や文脈に適応（適合）してしまっていることこそ問題にすべきであることを本論文は提案している。さらに、問題行動とその対処という悪循環のシステムが作動していることからも、問題行動を適応的な行動ととらえることで悪循環への介入の様々な可能性が開かれることに注目すべきであることを本論文は提案している。この視点は、学校における問題行動に対処する教師などにも実践的に様々な可能性を開かせるものである。

以上の総合的評価から本論文は博士の学位を授与するに充分値するものと当該の論文審査委員会は判定した。

4. 大久保 智生 氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学 教授	博士（人間科学）（大阪大学）	野嶋　栄一郎
審　査　員	早稲田大学 教授	博士（人間科学）（早稲田大学）	斉藤　美穂
審　査　員	早稲田大学 教授	博士（人間科学）（大阪大学）	石田　敏郎
審　査　員	東洋大学 教授	Ph.D.（Columbia University）	黒沢　香
審　査　員	早稲田大学 教授	文学修士（早稲田大学）	青柳　肇